

一 国資本主義分析の基本的意味について

——『ロシアにおける資本主義の発達』と『帝国主義論』との検討——

水 谷 謙 治

目次

はしがき

一 序 『資本論』の骨組と一 国資本主義分析における同書の意義

一 『資本論』のロシア資本主義分析への適用について

——著書『発達』の検討——

(一) 『発達』「第一章」の「理論的命題」の検討

(二) 右の理論のロシア資本主義分析への適用について

(三) 本章からの結論

二 『資本論』と『帝国主義論』との関連

(一) 『帝国主義論』の基本的内容

(二) 一 国資本主義分析における同書の意義

むすび

はしがき

科学的経済理論を適用して、一 国資本主義を分析し、その国における変革の諸条件を明らかにすることは、経済学の最も重

一 国資本主義分析の基本的意味について

要な課題の一つである。この課題を正しく追求するためには、なによりもまず、一 国資本主義を分析するとはどういうことか、あるいは、一 国資本主義分析に経済理論を適用するとはどういう意味か、ということとその十分な広がりと深さにおいて正確に把握することが決定的な鍵となる。私は、この問題を以前に、レーニンの著書『ロシアにおける資本主義の発達』(以下『発達』と略記する)の検討をとおして考察したことがある。そこで本稿でも、この考察を整理し、より深めたいと考える。だが、この考察範囲だけに止まっていたは、現代(帝国主義時代)における一 国資本主義分析の意味を十分に明らかにすることはできない。従って、本稿では、一 国資本主義分析ということの意味、あるいは、一 国資本主義研究に理論を適用するということの意味を、著書『発達』と『帝国主義論』の検討をとおして多少とも十分な広がりと深さにおいて考察したいと思う。そしてこのことによって、一 国資本主義論争の諸問題を解

決するための基本的視点をえたいと考える。

なお、『発達』をとりあげたのは、この著作が当時の「ロシアにおける資本主義の発展の全過程を全体として分析」(同書序文)している点でも、また、この著作でとりあげられている理論やその理論の適用をめぐる数多くの論争がおこなわれてきた点でも、当面の問題を考えるうえで最も適切だと思われるからである。『帝国主義論』をとりあげたのは、同書が、帝国主義時代の資本主義の根本的経済諸法則を究明している点で、矢張り当面の問題の研究にとって最も重要であると思われるからである。

また、本稿の課題の解決は、その中にいわゆる三段階論への評価を含まざるをえないが、この点にかんしては、適時注記において簡単に明らかにしてある。

序

『資本論』の骨組は、商品生産関係がいかにしようにしてうまく、それがいかようにして資本家的生産関係に転化し、資本家と労働者という敵対的階級をつくりだすか、また、資本家的生産関係はいかに社会の生産と交換を支配し、いかようにして社会的労働の生産力を発展させるか、そして、この発展させられた生産力と資本家的生産関係の枠とがいかに和解しえぬまでに矛盾するようになるか——かくして、いかにして資本主義自身を止揚する主体的、客観的諸条件が形成されるか——という、

資本主義社会の客観的發展法則を究明しているところにある。周知のごとく、『資本論』は、ブルジョア的経済構造の本質的要素たる資本をとりあげ、その「一般的分析」⁽¹⁾をとおして右の發展法則を明らかにした科学的経済理論にほかならない。

ここに資本の一般的分析をとおして右の法則を究明するということとは、一九世紀中葉(産業資本主義時代)のイギリス一國の範囲で、しかも同時に、全商業世界をイギリス一國ともみなして、資本家的関係をそれ自体としてとりあげ、その分析によって、右の發展法則を明らかにすること——つまり、歴史的な一國資本主義を対象にとり、そこでのあらゆる経済外的な攪乱的諸現象を捨象する一方、国家、外国貿易、世界市場等の諸契機をも、歴史的前提、あるいは「外延的」条件として固有の究明対象から「除去」し⁽²⁾、その経済構造とその必然的發展傾向を純粹に考察すること——を意味している⁽³⁾。

ところで、右の分析がどのように資本主義の特殊な發展段階に制約され、すぐれて歴史的 성격のものであることは、この分析の一般的性格を否定するものではない。総じて、一般的なものとは特殊なものの中のものに見出され、特殊なものをおしでのみ現われる。歴史的にも、帝国主義段階は産業資本主義段階を基礎とし、そこから直接に発生してくるから、前者の理論的認識は後者の理論的認識を一般的基礎とし、そこからの展開としてのみおこなわれうるのである。

以上のことからつぎのよういことができる。『資本論』

は、資本主義社会の経済的運動法則を總体的に研究する科学的経済理論の体系の骨幹、基柢をなし、一国資本主義分析に適用され、また、資本主義社会の新しい発展時代（帝国主義時代）の研究によって発展させられるべき一般的基础理論として意義をもつ。

「我々は、マルクスの理論を、決してなにか完成された不可侵のものとは考えていない。その反対に、この理論は、……今後あらゆる方向に前進させねばならぬ一つの科学の基石をおいたにすぎない。……我々は、ロシアの社会主義者にとって、マルクスの理論を自主的に仕上げることがとくに必要であると考え。というのは、この理論は一般的な指導的諸命題を提供しているだけで、それらの原理は個別的には、各国で「ちがったふう」に適用されるからである」（レーニン全集第四卷一九一—九二頁）。

(1) 『資本論』ディーツ版第三卷二六三頁、長谷部訳（青木文庫）(9)三四三頁。

(2) 例えば、前掲第一卷一五三頁（訳）(2)二八三頁、第二卷四七四—四七五頁（訳）(7)六一六—六一七頁、第三卷一三三頁（訳）(8)一八一頁、同卷一六六—一六七頁（訳）二一九—二二〇頁、同卷一八五頁（訳）一一七一頁、等々参照。

なお、この「除去」ということは、『資本論』でこれらの諸契機が固有の研究課題にされていないということであって、少しも考察されていないことを意味するものではない。むしろ同書が、

一国資本主義分析の基本的意味について

ブルジョア経済体制を構成する諸要素のうち、本質たる資本をとりあげたこと自体が、その本質の一般的究明に必要な限りで、自ずからこれらの契機に対する本質の規定的作用や、本質とこれらとの相互関連にかんする論及を包まざるをえぬのである。

(3) こうした抽象は、当時の世界資本主義におけるイギリスの客観的な対内的、対外的状態を反映したものであった。つまり、第一に、当時のイギリスは資本主義が高度に発達し、「従来の経済的状态の残滓をもつてする資本制生産様式の不純化と混同」とをいっそう除去し、「理想的平均」の資本主義に近似しつつあった（前掲第三卷八八五頁訳(9)一一七一頁）からである。第二に、当時のイギリスは、世界資本主義における「世界の工場」としての独占的地位をもち、従って「世界市場で王座を占め」、いわば世界資本主義そのものともいえるような状態にあったのである。

(4) くわしく引用するスペースはないが、宇野弘蔵氏は、資本主義の純粋化傾向を「思惟によって極点まで押し進めたもの」として、「純粋資本主義社会」といういわば一個のモデル社会を想定しておられる。そして、それがおこなう運動法則を「永久的に同じ運動を採返しつ」おこなうもののようにとらえて、これを「原理」（『資本論』に当る）とされ、この「原理」は「体系的に完結された形で展開され」るもので、資本主義の生成、消滅の法則をただちに解明しうるものではないと説かれている（『思想』一九五六年一月号、『経済学原理論』、『資本論』と社会主義」参照）。

だが、マルクスのいう科学的抽象ということから、右のようなモデルを設定する必要性を論理的に引出すことはできるものでは

ない。

対象としての現実の資本主義社会に存する攪乱の諸現象を除去したからといって、その社会が純粋な社会に転化するわけではないし、「下向」してえられた法則から展開がおこなわれるからといって、その法則の現実的歴史的性格に変わりはなく、思惟が創造した純粋なモデル社会のおこなう「法則」に転変するものでもない。さらに、あらゆる事物の発展には、決して単純一様な返復とか、量的な永久的増加などというものはありえない。そうである以上、その発展は、発生と消滅、相互転化としてののみ思惟に反映されねばならない。そうでなければ、思惟と存在との関連が否定されることになる。従って、生産様式の運動法則を追求する経済理論も、資本主義社会の歴史的發展過程に貫ぬく経済的運動法則を、首尾一貫して反映する「非完結的体系」としてのみ、その科学性を堅持しうる。しかし、氏の「法則」や「原理」にはなんの発展もなく、その「体系」には完結性がその特徴となっているのである。

一 『資本論』のロシア資本主義分析

への適用について

——著書『発達』の検討——

本章の課題は、著書『発達』の検討をとおして、『資本論』を一九世紀末葉の資本家的関係が支配的なロシア国民経済分析へ適用するというこの意味（従って、ロシア資本主義分析の意味）を明らかにすることにある（以下、本章に限りこと

わりなき場合は、『発達』——レーニン全集第四版の第三卷 ЛЕНИН СОЛЖЕННИК 3. Т. <ПЕЧАТАЕТСЯ ПО ПОСТАНОВЛЕНИЮ IX СЪЕЗДА Р.К.П.И СЪЕЗДА СОВЕТОВ С.С.С.Р.>——からの引用とする。また、レーニン全集からの引用は全部同版からのものとし、第〇巻と記すに止める）。

(一)

著書『発達』の目的は、「ロシアの資本主義のための国内市場がどのように形成されつつあるかという問題を考察すること」（三頁）、あるいは、「ロシアにおける資本主義の発展の全過程を全体として考察」（同頁）するという立場から、「ロシアの社会経済的構造と、従ってまた、階級構成との分析」（九頁）をおこなうことにおかれている。

同書は全八章よりなっているが、これを内容的にみるとつぎの二つの部分から構成されている。すなわち、その第一は「一般的理論的部分」であり、「第一章 ナロードニキ経済学者の理論的誤り」がこれにあたる。その第二は「理論的諸命題をロシアの資料に適用する部分」であり、「第二章」以下すべてがこれにあたる。

5 『ア・カ・チエボタレヴァへの手紙』（第三二卷一八頁参照）。

そこでまず、「第一章」の理論的諸命題の特徴を検討し、ついでその諸命題の適用にかんして検討していくことにしたい。「第一章」の課題は、「できるだけ簡単に資本主義のための

国内市場に於ける抽象的な経済学の基本的な理論的諸命題を考察」(六頁)することにあり、その基本的観点はつぎのよう
に示されている。「市場は、商品経済のカテゴリーであるが、
商品経済はその発展において資本主義に転化していき、資本主
義経済の下でのみ、完全な支配と全面的な普及をとげる。それ
ゆえ、国内市場に於ける基本的な理論的諸命題を検討するた
めには、我々は、単純商品経済から出発して、その資本主義
経済への漸次的転化をあとづけねばならない」(一三五頁)。

「第一章」の構成を示しておく、

第一節 社会的分業

第二節 農業人口の減少による工業人口の増加

第三節 小生産者の零落

第四節 剰余価値を實現することは不可能だというナロード

ニキの理論

第五節

資本主義社会における社会的總生産物の生産と流通
にかんするアダム・スミスの見解、およびこの見解
に対するマルクスの批判

第六節 マルクスの實現理論

第七節 国民所得の理論

第八節 なぜ資本主義にとって外国市場は必要か？

第九節 第一章からの結論

そこで、つぎに右の各節の内容と関連をごく簡単にとらえて
みよう。

一 国資本主義分析の基本的意味について

「第一節」では、社会的分業の発展が農工の分離、農業生産
の専門化の成長を現わし、商品経済と資本主義経済の発展過程
の基礎となること、従ってまた、資本主義のための国内市場の
創出過程における基本的契機であることが示されている(レー
ニンに於ては、市場は商品経済における社会的分業の表現と
して把握されている)。ついで「第二節」では、発展しつつあ
る商品経済を特徴づける最も一般的現象として、農業人口の減
少による工業人口の増加、それに伴う産業中心地の形成の不可
避性が説かれている。レーニンは他の箇所、この現象は、一
国の資本主義的発展を最も端的に、最も浮彫的に示している点
で、商品経済から資本主義的商品経済への発展を問題にする場
合には必ずふれねばならぬものであると指摘している。⁽⁶⁾

(6) 第二卷二〇四—二〇九頁参照。

「第一節」と「第二節」では、「単純商品生産をとりあつか
ってきた」が、「第三節」では、「資本主義的生産に移る」(一
九頁)。この節では、小生産者の賃銀労働者への転化が彼らの
『零落』として現われ、この過程が二つの側面——一面では、
生産手段を失った生産者がおこなう労働力の販売とそのこと
によって彼らを作りだす商品としての生活手段への需要の増加、
他面では、彼らの手放した生産手段を所有する人達がおこなう
一層大規模な商品生産と、それによる新しい原料、用具、彼ら
の生活手段への需要の創造——から国内市場を創出することが
示されている。なおこれらの見解は、『資本論』第一卷第七篇

第二十四章の内地市場の創出にかんする叙述から引出されている。

ところで、これまでの三つの節における国内市場の問題の説明をみただけでも、その説明は、資本主義の歴史的発展における基本的諸契機——現物経済の商品経済への転化（これは社会的分業の発展によって説明された）と、商品経済の資本主義経済への転化（これは小生産者間の競争、分解によって明らかにされた）——との関連によってのみ説かれていることがわかるであろう。

「第四節」と「第五節」は、正しい実現理論の観点から資本主義的生産の発展（Ⅱ国内市場の拡大）の特徴を明らかにし、ナロードニキの誤った市場概念を批判するところの「第六節」の、いわばまえおきにあたっている。というのは、これらの節は、「実現」・「市場」という概念を正しくとらえ、この問題の正しい提起をおこなうために、ナロードニキのおこなったこの問題の誤った提起の仕方を取りあげ（第四節）、またアダム・スミスのドグマ（ $V+M$ ）こそ、この問題の正しい提起と解決を不可能とした基礎であることを示す（第五節）ものだからである。

「第六節」は、実現理論をあつかってはいるが、その専門的考察が課題となっているわけではない。課題は、実現理論にかんする基本的考察から、資本主義的生産、従ってまた国内市場の拡大の特徴——資本主義生産の発展は、消費手段の増大よりも生産手段の増大によっておこなわれ、生産手段部門は消費手

段部門よりも急速に成長するから、国内市場の成長も、個人的消費の増大からある程度『孤立して』生産的消費の増大によってより多くおこなわれるという特徴——を明らかにする点にある。つづく「第七節」は、国民所得にかんする実現理論の意義を示し、この点でのナロードニキの誤りを批判するものである。「第八節」は、資本主義の歴史的発展にとつての外国貿易の必要性の原因と、その原因の歴史的性格を明らかにし、剰余価値実現の困難を外国市場に求めるナロードニキの見地を批判している。最後の「第九節」では、これまでの要約がなされ、つぎの結論が引出されている。「以上のべたことから自ずから明らかのように、資本主義の発展段階から独立した別箇の自立した問題としての国内市場の問題というものは決して存しない。……国内市場は商品経済が現われるときに現われる。国内市場はこの商品経済の発展によって作りだされ、社会的分業の細分化の程度が国内市場の発展の高さを規定する。国内市場は商品経済が生産物から労働力へ転化するのに従って拡大し、この転化の度合に応じてのみ、資本主義は国の全生産をとらえ、主として資本主義社会でますます重要な地位を占めていく生産手段の増大によって発展していく。資本主義のための『国内市場』は、発展しつつある資本主義それ自身によって形成されるが、この資本主義は社会的分業を深め、直接的生産者を資本家と労働者とに分離していく。国内市場の発展の程度は、その国における資本主義の発展の程度である」（四七頁）。

以上の考察を念頭に入れて本章の構成をみるならば、「第一節」から「第三節」までは、商品生産の成長とその資本主義生産への移行にかんする基本的現象をあつかい、「第四節」から「第八節」までは、ナロードニキの市場概念を批判する中で、資本主義生産の独自の発展の諸特徴を示し、「第九節」で、商品生産と資本主義生産の形成と発展を示す諸現象が国内市場の形成と発展を規定するのだというように総括されていることがわかるであろう。

それゆえ、「第一章」の「理論的命題」は、国内市場の生成と発展の過程が商品生産の発展とその資本主義生産への移行、および資本主義生産の一層の発展という必然的過程にほかならぬということ、国民経済の最も一般的現象（例えば、農業と工業との分離、商業的農業の成長、農業人口の減少による工業人口の増大、小生産者の零落、等々）をとおして——換言すれば、これらの現象が国内市場の発展に対してもつ意義を明らかにして——説明したものであることがわかる。そこで、その性格を一言で特徴づけるならば、これを資本主義社会の形成と発展にかんする理論といえよう。

それゆえにまた、「第一章」の「理論的諸命題」は「実現・市場理論」の説明につきるものではない、ということが明白である。国内市場の問題にかんしてとりあげられた『資本論』の種々の叙述は、すべて資本主義の発生と発展の不可避性において、その一環としてとりあげられている。市場理論Ⅱ再生産論

一 国資本主義分析の基本的意味について

も、ナロードニキの誤謬を批判し、資本制生産Ⅱ市場の発展の根本的特徴を示すために利用されているのである。

さらに、副題で示されている「大工業のための国内市場の形成過程」の分析ということも、結局、ロシア国民経済は商品経済と資本主義経済の成長をもたらしているかどうか、また、どのようにもたらしているかという問題、総じて、ロシアにおける資本制生産の発展とその特質にかんする研究に帰着させられることが明らかとなる。「ロシアの国民経済の種々の側面は、どのように、またどの方向に発展しているか？、これらの種々の側面のあいだの相互依存性とはどういう点にあるか？、後につづく諸章は、これらの問題に対する解答を含んでいる諸資料の考察にあてられるであろう」（四七頁）。

最後に、レーニンはその当時のロシア資本主義の分析へ「『資本論』を個別的に適用する」ために、その最も主導的、中心的理論として、資本主義の形成と発展にかんする理論をとりだし、これを「第一章」で国内市場の形成と発展という視点から整理しているということがわかる。そしてこの点に、「発達」「第一章」の「理論的諸命題」と『資本論』との主要な関連があると考えられる。

(二)

ここでの課題は、ロシアの国民経済の研究に先述の「第一

章」の「理論的諸命題」を適用して、ロシアにおける資本制的生産様式の発展過程とその特徴を明らかにすることの意味を、「第二章」から「第八章」をとおして考察することにある。この考察を各諸章の詳細な内容にまで立入っておこなうスペースがないので、これを各諸章の基本的構成の検討と、および典型として抽出した一、二の章の概括的検討にしぼっておこなうことにしよう。

まず、農業部面における資本主義の発展の分析が、工業部面のそれに先立っておこなわれていることに注意されたい。その根拠となる理論的説明は、「第一章」に示されているように、資本主義的工業が農業における商品生産の発展の結果としてのみ実存する、という点にある。なぜなら、採取産業と加工工業とが自生的に結合していた資本主義以前の社会の住民は、ほとんどが農民に直接的小生産者であったが、農業における商品経済の発展は、農民分解をおしすすめて資本関係を形成し、また、農業からの個々の工業部門の分離をもたらすからである。

つぎに、前半の三つの章——「第二章 農民層の分解」、「第三章 賦役経済から資本主義経済への地主の移行」、「第四章 商業的農業の成長」——をみると、農業部面における資本主義の発展は二つの側面——すなわち、農民経営と地主経営の所与の生産関係という側面と、商業的農業の成長（農業生産の成長とその諸形態）という生産関係の特質を示す限りでの「生産力

的」側面から分析されていることがわかる。とくに、農民経営における生産関係の分析を「農民層の分解」として最初にとりあげていることも、「第一章」からの直接的結論——農業生産の主要な担い手は農民であり、「資本主義的生産における国内市場の形成の基礎は、小農耕者が農業企業家と農業労働者にわかれていく過程である」（四八頁）に依拠し、これを応用したものと考えられる。

「第五章 工業における資本主義の最初の段階」、「第六章 資本主義的マニファクチュアと資本主義的家内労働」、「第七章 機械制大工業の発展」。この三つの章では、工業における現存の生産諸方法とそれに照応した生産関係、およびその進化の過程が研究されている。この三つの章をとおして注目されることは、さしあたりつぎの二つの点である。第一に、どの章においても、それぞれの生産方法の発達段階を特徴づけている『資本論』の叙述（第一巻四篇十一章—十三章参照）が提示され、この真理がロシアの工業ではどのようになっているか、また、この生産方法に対応した生産関係（とくに労働者の地位と状態、資本家との階級的矛盾）がどのようにになっているかが研究され、さらに、同じように『資本論』で明らかにされている資本制的生産の三つの発展段階の必然的関連が、ロシアの工業の歴史的、具体的諸条件の中でどのように現われているか、というかたちで研究が進められていること。第二に、研究は大工業から始められないで、最も遅れた形態から進んだ形態への歴

史的発展として描かれ、同時にその歴史的発展関係が、遅れたものに対する進んだものの支配の確立過程であり、現在の大工業と他の諸工業形態との支配、従属関係を示すものとして描かれていること。

つぎに「第二章 農民層の分解」を典型としてとりあげ、農民経営における資本主義の発展がどのようにして明らかにされているかをみることにしよう。

ここでとりあげられている諸資料は、農民層分解にかんするゼムストヴォ統計資料である。農民層の分解においてとくに重要性をもつ資料としては、労働力の売買(賃仕事、日雇、それらをもつ農家数)、買取地、借地、貸出地、分与地の大きさ、家畜と改良農具数、作付面積、商工業企業者の経営数、等々がとりあげられている。研究(叙述)の順序は、つぎのとおりである。まず、これらの諸資料の検討(第一節―第八節)、その総括と結論(第九節)、軍馬資料をおしてこの結論が全諸果に妥当するかどうか、また分解が歴史的に進行しているかどうかを検討(第十、第十一節)、家計にかんする資料をおして農民経営の型の差異をうらづける(第十二節)、結論(第十三節)。第一節―第八節の農民分解にかんする諸資料の考察では、前述の諸資料をおして、上、中、下の三クラスに農民群が区分され、それぞれのクラスの経済的特徴づけがおこなわれる中で、農民層の分解と農民ブルジョアジーの支配が明らかにされている。とくに、農民経営の分類は、もっぱら農民経営の経済

一 国資本主義分析の基本的意味について

的資力によっておこなわれている。この方法はいうまでもなく、小規模農業の資本主義的進化の全本質が、農民間の競争と不平等の進展に伴って、資本家的関係に転化とすところにあるという「第一章」の説明に導かれている。なお、本章では、商業資本と高利貸資本が、資本主義の発展に対してもっている意義にかんする理論(『資本論』第三卷第四篇第二〇章)を、「ロシアへ適用する場合」について、つぎのように指摘されている。この場合には、「我国で商業資本と高利貸資本は産業資本と結びついているか、商業と高利貸業は、古い生産様式を分解して、資本主義的生産様式を持込んでいるか」という「事実の問題」を、「ロシアの国民経済の全側面について解決せねばならない」(一五二頁)。そして、農民的農業においては、これまでに検討した資料から、『資本論』の右の理論的真理が妥当していると結論づけられている。

「第二章からの結論」のうち、つぎの指摘はきわめて重要である。「農民の中の社会経済関係の構造は、どんな商品経済にもどんな資本主義経済にも固有なあらゆる矛盾の存在を、我々に示している。すなわち、競争、経済的自立のための斗争、土地の横奪(買取りと借地)、少数者の手への生産の集中、プロレタリアートの隊列への多数者の押し出し、商業資本と雇農の雇用とによる少数者の側からのプロレタリアートの搾取、である。資本主義的構造に特有の、この矛盾した形態をもたないような、……経済現象は、農民層のなかになにか一つない」(二〇四

一九三

頁)。「農民のあいだでのすべての経済的矛盾の総体こそ、我々が農民層の分解と呼んでいるものを成している。……この過程は、新しい型の農村住民がつくりだされることを意味する」(一四一—一四二頁、ゴチック—引用者)。

「固有のあらゆる矛盾」とは、商品経済と資本主義経済を特徴づけ、これを前進させずにはやまない必然的諸関係(Ⅱ発展法則)にほかならぬ。つまり、レーニンは農民経営におけるすべての経済現象の中にこの矛盾を検出し、個々の現象をこれとの関連で位置づけ、全体として、「農民層の分解」という最も主要な現象においてこれを総括し、ロシアの農民経営における資本家的生産関係の必然的発展を示したといえる。そして、かゝる方法こそ、全章に貫徹されているものである。

ロシアでの資本家的生産様式をとりまく特殊の経済諸条件としては、賦役経済制度の主たる残存物すなわち雇役経済制度をはじめ、債務奴隷制、高利貸業、農奴制的租税等が指摘され、これらの遺物によってロシアの資本主義的進歩にブレーキがかけられていることが明らかにされている。しかし、レーニンにとって、こうした特殊な諸条件は、ロシアの資本主義的発展の諸形態をきわめて多種多様なものとし、発展の重大な障害となりにえても、発展を不可能にするようなものではない。(レーニンは、この点を『資本論』第三卷第三七章六六五頁の叙述で根拠づけている)。「第三章」においても、ロシア農業における農奴制度の強大な残存物が雇役制度という形態で資本主義制度と

多種多様からみ合っていること、にもかかわらず、徐々に後者が優勢になりつつあること等が示されている。これは、役畜と農具類をもつ農民だけのおこなう雇役(「輪耕」地耕作など)と、農具類をもたぬ農村労働者もおこなう雇役(草刈り、脱穀等)との区別づけをおこない、前者から後者への重心の移行を表示する仕方でも証明されている。なおここではロシア全体における雇役制度の残存Ⅱ普及の程度が、資本主義制度との比較によって表示されている。

「第八章」は、これまでの諸章を総括するものである。その総括をみていくと、国民経済の種々の側面における諸現象を、「第一章」の資本主義の形成と発展の法則との関連においてとらえることをおして、ロシアにおける資本主義の発展過程が概括されていることがわかる。また、国内市場の形成という視点からの総括は、内容的にみると結局、生産の社会化(社会主義の客観的条件)の成長をとらえることと、他方ブルジョアジーとプロレタリアート(とくに後者)の種類、実存形態、各産業部門間における実数、他の階層との関連、全体の総数等々ととらえること——つまり、資本主義の変革の主體的勢力の成長の度合と配置、他の階級、階層との関連を明示すること——に帰着させられていることがわかる。

外国貿易のあつかいについて。「資本主義的国民は外国貿易なしにはやっていけない(四二頁)。しかし、「実現の問題は、資本主義一般の理論にかんする抽象的な問題である。一国をとる

うが、あるいは全世界をとらうが、……実現の基本的諸法則は同じままである。外国貿易あるいは外国市場の問題は、歴史的な問題、一定の時代の一定の国における資本主義の発展の具体的な諸条件の問題である」(第四卷七五—七六頁、傍点引用者)。資本主義国にとって外国市場の必要性の原因——それは、外国市場が資本主義の歴史的前提であること、生産部門間の発展が不均等であり、また、生産規模の無限の拡大傾向はあらゆる境界を突破していくことにある——は、「すべて歴史的性格のもの」である。「それらの原因を究明するためには、……国内における資本主義の発展の諸事実をとりあげねばならぬ」(三四—三五頁)。

『発達』のばあい、右の観点に立って、資本主義の国内市場と外国市場という区分は、「資本主義の内包的発展、すなわち、所与の封鎖的地域における資本主義的農業と工業のいつその発展、および、資本主義の外延的発展、すなわち新しい地域への資本主義の支配範囲の拡大」(五二二頁)という区分に代置されている。そして、「ロシア資本主義の全発展過程を全体として分析し描きだす」という「広範な課題は、到底一個人の力のおよびえぬところ」(三頁)だから、その制限として、分析範囲を、もっぱら過程の第一の側面にだけ止め」(五二二頁)、「外国市場の問題や外国貿易の資料を留保しておく」(三頁)とされている。内容的にみると、「第八章」(総括)で、商品流通の急速な成長について「一般的表象を与えるために」、対外的貨物輸送量の増

一 国資本主義分析の基本的意味について

加、輸出入総額と人口一人当りの対外貿易額の発展にかんする資料を提示し、第二の側面の重要性を強調したうえ、「ここでは、ロシアはその辺境に自由で接近しやすい土地が豊富なので、他の資本主義国とくらべて特に有利な条件にあることを強調すれば充分である」(五二三頁)と指摘するに止められている。

(三)

これまでの考察から、若干の帰結をひきだしておくことができよう。

① レーニンのは、当時のロシア国民経済の発展過程を『資本論』の適用によって明らかにし、ロシアの経済的構造、従ってまた階級構成とその発展方向を明らかにした。『資本論』を適用する場合、彼は、最も主導的、中心的理論として資本主義の形成と発展に支配的法則にかんする理論をぬきだしている。すなわち、その理論の中心的内容をなすものは、第一巻の商品生産と貨幣流通の発展、貨幣の資本への転化における基本的諸条件、資本制の生産方法とそれに照応する資本制の生産関係の歴史的發展段階、およびその必然的関連、機械制大工業の支配が国民経済の諸分野にもたらす諸作用にかんする理論的説明等々である。第七篇二四章七節「資本家的蓄積の歴史的傾向」では、これらの説明が概括してスケッチされている。第三巻の商人資本と高利貸資本の歴史的役割や、資本制の土地所有の発生史、資本制生産が土地所有形態や農業における封建的諸関係に

および作用等にかんする理論的説明も、すべて右の資本制生産の生成、発展の基本的理論との関連でとりあげられ、その一構成部分とされている。そして、こうした理論をロシアへ適用するというこの意味は、この理論に示されている資本主義の発展法則が、農奴制改革後約三〇年間にわたってロシア国民経済のすべての側面——主として農業における農民と地主の経営、農業生産、工業における小営業、マニユファクチュア営業、機械制大工業——の種々の経済現象の中にどのように貫ぬいているかを研究し、これらすべての現象を右の法則(「基砥」)に關連づけることによって、ロシアの経済的構造とその発展方向を説明すること、にほかならない。

当時のロシアでは、国民経済の著しい後進性のため、資本主義が支配的になりつつあるかどうか(とくに農業で)ということと自身が論議され、革命運動に重要な影響をもっていたナロードニキは、農民が大多数で貧困化しているロシアでは資本主義の発展は不可能であると主張していた。そこでレーニンは、これまでにもたように、ロシアの全国国民経済における資本主義の発展に確立過程を必然的なものとして明らかにし、またその中で、ロシア資本主義の経済構造を描きだしたのである。以上が、資本家的生産様式が支配的であったロシア国民経済の分析、従ってまた、ロシア資本主義分析の主要な意味である。

それゆえ、これを一国資本主義分析の主要な意味として一般のにのべるならば、つぎのようことができる。レーニ

ンにとって、一九世紀産業資本主義時代の一国資本主義の分析ということの意味は、『資本論』における資本主義の形成と発展に支配にかんする理論を適用し、ある一国の資本制的生産諸關係——従って階級構成——とその発展方向を具体的に研究することである。そして、ここに右の理論を適用するということは、右の理論に示される資本主義の発展の諸法則が、その国の具体的諸条件の中で、どういう諸形態をとってどのように貫徹しているかを、国民経済のあらゆる側面において明らかにすることにほかならない。⁽⁸⁾

(7) 以上にみられる『発達』の資本主義の形成と発展の理論を、帝国主義時代はいうまでもなく、同じ時代であったとしても、充分に成熟した大工業国(例えばイギリス)の説明に『発達』とまったく同じようなかたちで機械的に適用することは正しくないであろう。なぜなら、この場合には、資本主義が支配的になりつつあるかどうかはすでに自明であるから、もっぱら分析の重点は、現時点でいかに資本主義的支配がおこなわれ、それがいかなる方向へ進みつつあるかを明らかにすることにおかれればよいからである。それゆえこの場合には、適用されるべき資本主義の発展の理論も、『発達』「第一章」のような構成をとる必要はなく、主として、大工業の巨大な発展過程とその種々の作用にかんする理論を中心にして構成されればよいであろう。

(8) 宇野弘藏氏は、いわゆる段階論的視点から『発達』に言及され、一国資本主義の特殊性を明らかにすることは、レーニンが『発達』でおこなったように「単に一般的原理的なものに対して

特殊な、個別的な現象を対比するだけで出来る」ものではないとされている。そして、その理由を、「個々の国々の資本主義の発達は、それぞれ一定の資本主義の世界史的段階においてあらわれるのであって、……一般的なものと個別的なものとの間には、この資本主義の歴史的発達段階というものが仲介として入っている」という点に求めておられる。つまり、レーニンの誤りも、この「段階規定」という媒介を欠いたところにあると主張されているのである（『資本論』と社会主義「一〇——一〇三頁」）。

しかし、一国資本主義を研究するさいに、「原理」を「段階規定」の媒介なしに「適用」することが誤りだという見解は、資本主義の一定の発展段階の特質と法則を明らかにしないまま、無批判に『資本論』を適用することの誤りをゆがめて表現したものにすぎないと考えられる（「ゆがめて」というのは、氏のいわれる「原理」が、すでに序章注記でのべたように、『資本論』の根本的性格を正しく示すものではないと思われるからである）。そうであるとなれば、『発達』はこうした誤りを犯しているであろうか？否、である。「どういふ社会問題を考察する場合でも、それを一定の歴史的な枠の中で提起し、つぎに問題になっているのが一国……である場合には、同一の歴史的時代の中でその国を他の諸国から区別している具体的特殊性を考慮することが、マルクス主義理論の無条件の要求である」（第二〇巻四二七頁）と主張したのは、ほかならぬレーニンである。氏にあっては、『資本論』が永久不変の「原理」として把握されているから、その直接の『適用』も「段階規定」の無視ということの意味してくるのであ

一国資本主義分析基の本の意味について

るうが、すでに指摘したとおり、『資本論』は産業資本主義段階の資本主義の基本的法則を説明したものであって、『発達』もこの産業資本主義段階にあるロシアを対象としたからこそ、『資本論』を直接に適用しているのである。

また、氏は『発達』におけるレーニンの方法について、「原理的なものに対して特殊な個別的な現象を対比するだけ」というようにのべておられるが、レーニンにあっては、かかる「対比」はいささかも問題でなく、両者の必然的関連を説明すること、すなわち、ロシアで資本主義の生産様式が必然的なものとして支配的になりつつあるかどうか、その過程の特質はどのようなものか、ということをいかにして明らかにするかが問題なのである。この解決のために、「原理」を基準にしてえられる「世界史的類型」を標準にし、それに対する特殊性をみるという方法をとるならば、当面の段階を「規定」する「型」が前段階からどのような必然性をもって発生してきたかを理論的に——すなわち、前段階を規定する法則の貫徹として——説明しえぬであらうし、さらに、その特殊性も単に分類上、標準からの偏差として記述されるに止まり、これらの特殊性として発現する法則を説明しえぬことになるであらう。

② 『発達』「第一章」が再生産論を明らかにしており、「第二章」以下へこの理論が適用されているという理解から、一国資本主義（とくに確立期）の分析へ再生産論を適用しようとする試みがある。そして、この正否にかんしては、我国資本主義論争においてもさまざまな議論されてきている。だが、すでに

明らかかなように「第一章」の理論は、再生産論Ⅱ実現理論につきるものではない。この点はきわめて明白であり、この点での右の試みの誤りを云々する必要はないと考えられる。ここでは、ただ、「第一章」の「命題」を本来の再生産論と区別された「市場理論」、「国内市場形成の理論」と呼ぶことについて一言指摘するに止めたい。すなわち、市場概念を商品経済のカテゴリーとして把握する限り、『資本論』第二巻で厳密に規定されている再生産論と区別された「市場理論」という表現は明白な誤りであるし、また、「国内市場形成の理論」と呼んでみても、国内市場の形成が資本主義の形成に帰着する以上、やはり「第一章」の理論は、資本主義の形成と発展の理論というのが最適の表現である、という点である。

なお、資本主義の形成と発展の理論も「再生産論」に含まれているという考えがあるとすれば、それは、すべての理論を再生産論一色でぬりつぶすことを意味する無意味な主張でしかない。

③ 一 国資本主義分析における外国貿易のあつかい方。資本主義一般の理論をあつかう場合には、外国貿易の問題は不必要なものとして除外されるが、一 国資本主義を分析するさいには、外国貿易はその国のおかれている歴史的、具体的条件の問題として必ずとりあげねばならない。しかし、一 国資本主義の複雑な発展過程を研究する場合、一 国内部（所与の封鎖的地域）における資本主義の基本的諸条件・資本関係の形成と発展・

の研究にその範囲を限定する限りでは、対外貿易の問題はその国の資本主義の歴史的前提、および対外的条件（あるいは「外的発展」の問題として、適当な箇所でごく簡単にその資料なり特質を指摘したうえで、留保し「除外」しておくことが必要である。この方法は、一個人が一 国資本主義の複雑な過程を分析し、その国の階級関係を描きだそうとする場合に必要となるであろう。注意を要するのは、『発達』の研究で外国貿易の問題を「留保しておく」(ОСТАВИТЬ В ЦЕЛОМ) ということが、完全な捨象ということではなく、先述のようなかたちでごく簡単に「とりあげられ」たうえでの「留保」、「除外」だということである。

ところで、帝国主義時代における一 国資本主義の発展を研究するさいには、研究範囲をもっぱら「内包的発展」だけに止めておく（従って外国市場の問題も「留保しておく」ことは不適切であろう。なぜなら、ある国の資本関係をとらえる場合、産業資本主義段階における外国貿易は、この資本関係にとって、主として単なる商品価値の実現と質料変換の問題として意義をもっていたのに対して、帝国主義段階では資本輸出が典型的となり、外国貿易は右の意義に止まらず、一 国内に止まりえなくなった資本関係そのものを現わし、金融資本の支配の国際網を形成する基本的契機として意義をもつからである。

④ 『発達』の分析から、当時のロシア国民経済の主要な特徴はつぎの点——、すなわち、資本主義の発達が全国民経済の

基本的過程をなし、なお一層ブルジョアの発展の方向に向っているが、他方で農民が人口の大半を占め、農奴制度のあらゆる残存物が強力に維持され、右の過程と「からみあい」、その過程の阻止要因として作用しているという点——にあることが明らかとなる。『発達』の序文では、『発達』の分析から明らかにされたロシアにおける諸階級の構成、性格、役割、および当面する革命の性格と発展方向について、おおよそつぎのような帰結が引出されている。

ロシア国民経済の基本的発展傾向は、あらゆる部面における資本家と労働者の階級斗争を本質的なものとして押し出し、社会変革におけるプロレタリアートの指導的役割と人口にくらべてもつその巨大な力を明示している。農民は賦役経済と農奴制度のあらゆる残存物に対しては革命的立場に立ち、他方、その内部にある経営主的傾向とプロレタリア的傾向とによって動搖的立場に立つという、二重の性格と二重の役割を有している。

プロレタリアートの指導的役割と力量、農民のあいだでの二つの潮流の経済的基礎は、『発達』で証明されており、かかる経済的基礎上では、ロシアにおける革命は不可避にブルジョア革命である。だが、この経済的基礎上では、客観的には「この革命の発展と結末の二つの基本線」がありうる。一つは、反動的ブルジョアジーと地主が指導権をとり、農奴制と結びついた古い地主経営が除々に純資本家的なユンカー的経営に転化し、地主的土地所有者の大半と古い『上部構造』の基柱が保持される

一 国資本主義分析の基本的意味について

線である。もう一つは、反革命的ブルジョアジーを中立化させたプロレタリアートと農民大衆の指導権の下で、古い地主経営と農奴制の全遺物（とくに大土地所有）とそれに照応する『上部構造』を革命的に破壊し、資本制的生産力をより急速に自由に発展させ、社会主義的変革のために最も有利な諸条件をつくりだす線である。

右のような把握が、ロシア社会民主労働党の綱領の理論的基礎となったのである。このことは、レーニンにとって、一國資本主義的分析が、その国におけるプロレタリアートの革命斗争の主體的、客観的諸条件とその発展方向を明らかにすることにより、その国の社会主義的変革のための斗争において決定的な意義をもつことを明示している。

二 『資本論』と『帝國主義論』との 関連について

前章では、一國資本主義分析に適用される理論は、『資本論』における資本主義の發展法則にかんする理論であることが、『発達』の検討にそくして明らかにされた。だが、資本主義の發展は、『資本論』が対象とした産業資本主義段階をのりこえ、新しい發展段階（帝國主義段階）をもたらし、資本主義の發展法則の内容に新たな変化を「つけ加え」た。本章の課題は、この「新たな変化」を前段階の發展法則の内容との関連において理解すること——このことは、著書『帝國主義論』と『資

一九九

本論」との主要な関連を明らかにすることによって果しうる——をとおして、前章で考察された一國資本主義分析の意味をより深めることにある。(以下、引用文でことわりなき場合は、『帝國主義論』—ИМПЕРИАЛИЗМ КАК ВЫШАЯ СТАДИЯ КАПИТАЛИЗМА ЛЕНИН СОСРЕДИНЦЕ 22—からの引用とする。)

(一)

『帝國主義論』の課題は、「すべての国の争う余地のないブルジョア統計の総括的資料に基づいて、国際的な相互関係における世界資本主義経済の概観図が、二〇世紀初頭に、すなわち最初の全世界的帝國主義戦争の前夜に、どのようになっていたかを示すこと」(二七頁)、また、「現在の戦争と政治とを評価するさいに、それを研究しておかねばなるも理解しえぬ根本的經濟問題、すなわち帝國主義の經濟的本質の問題」を研究すること(二一六頁)、におかれている。つぎに、その基本的内容を各章をおってごく簡単に考察する。

「第一章 生産の集積と独占」。ここでは、生産の集積による独占の発生が資本主義の現在の發展段階の根本的法則であり、この独占はあらゆる面で中小経営に優越し、支配と強制的關係として現われ、他方、生産をその全面的社会化へと接近させて資本主義の基本的矛盾をいっそう激化させ、『資本主義の最新の局面の最後の言葉』となる、という諸点が明らかにされ

ている。なお、生産の集積が一定の發展段階で独占へ接近する理由については、「わずか数十の巨大企業にとって相互の協定に達することはわけではない、他方、まさに企業規模が巨大なために競争が困難となり、独占への傾向が生みだされるからである」(一八五頁)と説かれ、独占が一般化した時期は、二〇世紀の初頭であると確定されている。

ここで、独占の発生が、工業の巨大な發達と一層大規模な企業への生産の集積の發展から説明されている最も一般的理由は、それらが結局、生産力の發達を表現し、この發達こそ、生産關係の変化をもたらす基底的要因だということにあるが、資本主義の下では、この生産力は資本の生産力として現われるから、独占への傾向の究明も、生産の集積を著しく發展させていく資本の内在的諸法則の理解に基づかねばならぬ。かかる説明は『資本論』でおこなわれている⁽¹⁾。

それゆえ本章では、生産集積の巨大な發展の必然性の考察が前提とされ、そのうえで、生産集積の發達はその一定段階で自ら独占へ接近する理由——競争の困難さと協定の容易さ——を指摘し、今日マルクスの示した傾向は事実となった(一八八頁)、というように説かれているのである。

(1) 『資本論』では、独占への傾向は資本概念そのものから把握されている。例えば、第一巻のみを見ても、最高の剰余価値を得んとする資本の本性が、諸資本相互の關係(競争)で、つねに相手を排除しようとする志向・行動——とくに競争に勝つための生

産方法の改善と規模の拡大——として現われる(第三篇二八二頁(訳)(2)四六五頁、第四篇三三一—三三四頁(訳)(3)五三—五三八頁、等参照)。すでにこの志向が、独占への可能性にほかならない。資本概念自体がすでに大なり小なりの生産の集積を前提条件に含んでいる(第三篇三二二頁(訳)(2)五二二頁)。そして、資本制生産方法の条件が一定程度の資本蓄積である限り、この蓄積の増大は、生産集積の増大とそれに伴う生産力増大の方法の基礎であるから、両者は相互に作用して自己を増加させ資本の有機構成の高度化をもたらし、資本の最低分量を拡大させていく。かゝる資本蓄積は、一方では生産手段と労働の集積として、他方では多数の個別資本の相互反撥として現われる。だが、この反撥には吸引が資本集中として反作用する。なぜなら競争戦のための商品の低廉化は生産力に依存し、生産力は生産規模に依存する点で、大資本は小資本に打勝つからである。そしてこの集積は、その最も有力な二つの横杆たる競争と信用の発達によつていっそう促進され、かくして、一定の事業部門に投下された全資本が一個の資本に融合することにもなれば、集中がその極限に達することになる(第七篇六五七—六六一頁(訳)(4)九七〇—九七三頁)。

「第二章 銀行とその新しい役割」。近代の独占体の実際の力と意義とにかんする我々の観念は、銀行の役割を考察に入れねば極度に不完全で貧弱なものになるであらう(一九八頁)。本章の中心的内容は、つぎの諸点にあるといえよう。すなわち、銀行業務の発展と少数銀行への銀行業務の集積に就いて、

一 国資本主義分析の基本的意味について

銀行は支払いの仲介者という本来的役割から、資本家と小経営主の貨幣資本や自国および他国の生産手段と原料資源の大半とを自由にする全能の独占者へ転化する。というのは、当座勘定等の銀行業務が巨大な規模に成長するにつれ、一部の独占者は銀行取引関係や当座勘定やその他の金融業務を通じて個々の資本家の営業状態を正確に把握し、彼らの運命を完全に決定しようようになり、社会全体の商工業務を支配するようになるからである。そして、右の全能の独占者への転化こそ、資本主義の帝国主義的資本主義への転化の基本的過程の一つをなしている。銀行はまた、つねに資本の集中と独占体の形成を促進しつつ、資本家階級全体の「一般的簿記」、「生産手段の一般的配分」、「生産の意識的統制」等の物的条件をつくりだし、生産の社会化をいっそう強化する。

銀行の集積が発展し、銀行トラストが形成されるにつれて、銀行資本と産業資本との結合——すなわち株式の所有とか、商工業企業への役員への派遣等——が発展し、前者への後者の従属が促進される。「このように、二〇世紀初頭は、古い資本主義から新しい資本主義への、資本一般の支配から金融資本の支配への転換点である」(二二三頁)。

「第三章 金融資本と金融寡頭制」は、独占とその支配が金融資本と金融寡頭制というかたちをとることを、国内的、国際的諸側面から明らかにするものである。

「生産の集積、そこから成長してくる独占体、銀行と産業と

一 国資本主義分析の基本的意味について

の融合あるいは癒着、これが金融資本の発生史であり、その概念の内容である」(二一四頁)。独占体が金融資本として必然的に金融寡頭制になることは、独占による参与制度、会社設立、有価証券の発行、国債、大都市近郊の土地投機、政治生活(とくに国家)等々の諸契機の利用を考察することをとおして明らかにされている。さらに、金融資本の支配とは、いわゆる資本所有と資本機能の分離等にみられるような資本主義に固有の諸「分離」が著しい規模に達する資本主義の最高段階であり、金利生活者と金融寡頭制の支配と金融上の『力』をもつ少数国家他国家からの傑出を意味することが指摘されている。

(2) 金融資本の概念については、右のほかにも、「独占にまで成長して銀行資本と融合した巨大産業資本である」(第二三卷三五頁)とか、「産業家の独占団体の資本と融合している独占的な少数の巨大銀行の銀行資本」(二五三頁)といわれている。右の二つの「定義」は、一見相異なったもののようにみえもする。だが、レーニンにとっては、生産の集積から成長し、信用制度と必然的関連をもち(むしろこれを一要素として)、金融過程をおして全能の支配をおこなう独占が金融資本にはかならない。そこで重要なことは、生産の集積を土台として産業資本と銀行資本の独占が形成される過程では、両者は自から一定の必然的関連をもつようになり、この関連の下でのみその支配を全能とさせようということ、従って、かかる必然的関連は独占資本の基本的側面をなしているということである。従ってまた、右の二つの「定義」も、右の必然的関連を一方の視点から示したものであり、決して

内容上相異なったものではないと思われる。

「第四章 資本の輸出」。すでに前章では、金融資本の国際網の作出と金融上で強力な少数国家の支配ということが指摘された。そこで本章の課題は、このことを必然化させる最も重要な契機として、資本の輸出を考察することにおかれている。

自由競争の支配していた以前の資本主義にとつては、商品の輸出が典型的であったが、独占の支配する最新の資本主義にとつては、資本の輸出が典型的となった。二〇世紀初頭、イギリスの独占的地位が破れて資本主義の発達したすべての国々で独占が形成され、少数の最も富裕な国々の独占的地位が形成された。そして、これら先進国では膨大な『過剰資本』が生じたが、その原因は、資本主義の不平等な発展、とくに農業の未発展と大衆の貧困にある。この過剰資本が高利潤をもたらす後進国へと輸出されるのである。「資本輸出の必然性は、……資本主義が『爛熟』(農業の未発達と大衆の貧困という条件の下で)『有利な』投資場所がないということによって創造される」(二二九頁)。資本輸出は、帝国主義的抑圧と搾取の基礎であり、一握りの富裕な国家の資本主義的寄生性の基礎である。またそれは、全世界の資本主義的發展を一層深化し促進させる契機である。——以上が本章のごく主要な内容である。

「第五章 資本家団体間での世界の分割」。「資本を輸出する国は、比喩的な意味(マーケットという意味―引用者)で世界を自分らのあいだに分割した。だが、金融資本は世界の直接的

分割をもたらしした」(二三三頁)。本章は、この「直接的分割」を国際カルテルの形成において分析し、その分割が利潤の獲得のために不可避的であり、その方法も「資本と力に応じて」のみおこなわれること、従って——資本主義の発展の不均等性や戦争や倒産等の結果——、力関係の変化に応じて再分割の斗争がおこなわれざるをえないこと、を明らかにする。

「第六章 列強間での世界の分割」。「資本家団体のあいだには、世界の経済的分割を基礎として一定の関係ができてつあり、そして、これと並んで、またこれと関連して、政治的諸団体のあいだに、諸国家間に、世界の領土的分割、植民地のための斗争、『経済的領土のための斗争』を基礎として、一定の関係ができてつある」(二四一頁)。

本章では、現代の一大特質が、金融資本による地球の最終的分割——分割の完了——であり、来るべきものは再分割のための斗争だけであること、従って今日では、金融資本の支配する国家の国際的政策も、原料資源を独占しようとする金融資本の渴望を反映し、新しい植民地の獲得(そのための領土の再分割斗争)を目的としており、国家的従属の種々の過渡的形態を作りだしていること、また、再分割のためのかゝる斗争は、『力』に応じてのみおこなわれるが、今日、世界の経済的分割と領土的分割とは照応していないこと、等々が明らかにされている。

「第七章 資本主義の特殊な段階としての帝国主義」。以上の考察からつぎのような帝国主義の総括が引出される。

「帝国主義は、資本主義一般の基本的諸特質の発展およびその直接の継続として生じた」。だがそう言ったのは、「資本主義のきわめて高度な発展段階においてであって、資本主義の幾つかの基本的特質がその対立物に転化しはじめたとき、また、資本主義からより高度の社会へ経済制度への過渡期の諸特質があらゆる方面に渡って形成され、あらわになったときのことである。この過程で経済的に基本的なのは、資本主義の自由競争に資本主義的独占がとって代ったことである」(二五二—二五三頁、ゴチック引用者)。「帝国主義とは資本主義の独占的段階である」。一般にすべての定義につきものの条件的 相対的意義を忘れることなしに、つぎの五つの基本的標識を含むような帝国主義の定義を与えねばならぬ。すなわち、一、生産と資本の集積。これが高度の発展段階に達して、経済生活で決定的役割を演じている独占体をつくりだすまでになったこと。二、銀行資本が産業資本と融合し、この『金融資本』を基礎として金融寡頭制が形成されたこと。三、商品輸出とは区別される資本輸出がとくに重要な意義を獲得していること。四、資本家の国際的独占団体が形成されて世界を分割していること。五、資本主義的最強国による地球の領土的分割が完了していること。「帝国主義とは、……そういう発展段階にある資本主義である」(二五三頁)。なお、本章では右の総括につづいて、カウツキーの帝国主義の定義を超歴史的なものと批判する中で、再分割のため的手段には、戦争以外にはありえぬことが引出されている。

一 国資本主義分析の基本的意味について

二〇四

(3) 右の定義にかんするつぎの指摘は、帝国主義概念を考察するうえでとくに注意せねばならぬ。「あとでみるように、もし基本的な純経済的概念(前述の定義はこれに限られている)だけでなく、資本主義のこの段階が資本主義一般に対してもつ歴史的的地位、あるいは労働運動における二つの基本的傾向と帝国主義との関係をも考慮に加えるならば、帝国主義はこれと別様に定義しうるし、すべきである。だが、……右にのべた意味に理解された帝国主義は、疑いもなく、資本主義の特殊の発展段階である」(二五四頁)。

「第八章」―「第十章」は、右(注)の指摘をうけ、これまでの考察に基づいて、それぞれつぎの諸点を明らかにするものである。すなわち、「第八章 資本主義の寄生性と腐朽」は、資本主義的独占が独占価格や植民地独占を通じて不可避免的に停滞と腐朽の傾向をうみだし、また資本の輸出を仲介として、他国の搾取で生活する国に寄生性という刻印をおすこと、これら最も富裕な帝国主義国家の獲得する独占的高利潤は、プロレタリアートの上層部を買収し、国際的にも日和見主義を形成、強化させ、労働運動の潮流に分裂をもたらす経済的可能性をつくりだすこと、を考察する。

「第九章 帝国主義の批判」は、前章に基づいて、労働運動内部の小ブルジョア的、改良的立場からする帝国主義政策への種々の態度を批判するものである。

「第十章 帝国主義の歴史的地位」。本章は、これまでのす

べての章を、帝国主義の歴史的地位という点からつぎのように総括するものである。帝国主義はその経済的本質からすれば、独占資本主義である。そうである限り、帝国主義の歴史的地位もこのことよって規定されている。なぜなら、自由競争を基盤として成長してくる独占は、資本主義制度からより高度な制度への過渡だからである。これまでにみたような独占の主要な諸特質は、すべての側面で生産の完全な社会化が発展し、その外被との矛盾も極度に激化していることを示している。矛盾のこの激化こそ、歴史的過渡期の「最も強力な推進力」である。また、独占は帝国主義を寄生的で腐朽しつつある資本主義として特徴づけ、この特徴をあらゆる社会政治の中へもちこむが、他方、帝国主義時代の資本主義は、全体としては以前よりもいっそう急速に、しかも不均等に発展せざるをえない。「帝国主義の経済的本質について以上のべたすべのことから、帝国主義は過渡的な資本主義として、より正確にいえば、死滅しつつある資本主義として、特徴づけられねばならぬという結論がでてくる」(二八八頁、ゴチャック引用考)。

(二)

(一)の『帝国主義論』の基本的内容の考察からして、産業資本主義段階と帝国主義段階という資本主義の二つの歴史的発展段階においては、ともに資本主義的生産関係が支配している(剰余価値法則が貫徹している)点になんの変りもないが、資本関

係の支配の具体的内容につきのような著しい変化があることが明白となるであらう。

前者においては、資本家階級はすべて最高の利潤を求めて自由に競争し、その過程で——低利潤しかうまない生産部面から高利潤を生ずる部面へと自由に移動しあう過程を通じて——利潤を平均化させ、その資本の大きさにほぼ比例した利潤を実現しうる關係、総じて、各資本の力に応じてすべての資本家が労働者階級を「平等に、共同して」支配し搾取する關係が根本的特徴である。これに対して、後者においては、総資本（資本一般）のこうした「共同で平等な」支配と搾取はみられず、自由競争の結果として生じた独占が自由競争に代位し、ごく少数の独占資本による多数の中小資本、労働者、その他すべての階層、はては弱少な植民地、従属国民等の支配と、「独占利潤」の搾取——それは、単なる商品交換關係からだけではなく、国家の種々の制度や政策の利用、植民地従属国の種々の支配と収奪から獲得される——が根本的特徴となっている。前の段階では、あらゆる社会Ⅱ経済的諸過程・諸契機が、総資本（資本一般）によって規定されるのに、後の段階では、独占Ⅱ金融資本によって規定されるようになるのである。

この点は、例えば、『資本論』と『帝國主義論』における国家、外国貿易、世界市場等のとらえ方にも明白に示されている。『資本論』では、国家が、資本主義の發生期にはその歴史的前提・「本源的蓄積の本質的一契機」となったこと、さらに資

一 国資本主義分析の基本的意味について

本主義の発展に応じて総資本（資本家階級一般）の国家として、ブルジョア社会を「総括」し、維持し、剰余価値の再分配機能等を果たすことが種々の側面で明らかにされている。外国貿易についても、それは資本主義の幼年期にはその基礎であったが、その発展につれて資本主義の産物となること、つまり、より大規模に、より急速に生産し、かつよりいっそう広い流通圏域を求めようとする資本の本性を実現する要素、そしてすべての諸資本が競争し結びあう資本の國際網を作出する一契機であることが示されている。世界市場についても、それが「資本主義の基礎および生活圏」であり、従って資本主義のすべての矛盾の爆發の場という意義をもつものとしてとらえられているといえよう。そして、これらの意義は、資本一般の分析をおこなうのに必要な限りで明らかにされている。これに対して『帝國主義論』では、これらの諸契機は、すべて独占によって規定され、独占の本質的内容をなし、質的に發展した意義をもつものとして明らかにされている。すなわち、国家も従来までのように単に総資本（一般）の国家ということから、独占資本のための国家となり、強力によって植民地従属国民を収奪し、世界の再分割をおこなうことをはじめ、あらゆる政策と機構を働かせて独占資本のために奉仕するようになる。対外貿易も、資本輸出が典型的となり、独占資本の國際的支配と搾取網を作出し、植民地従属諸国に対する帝國主義的抑圧と搾取の經濟的基礎として機能するという新しい内容をもつようになる。世界市場も、独

占資本の世界的支配と収奪、世界の再分割の場として、従つて帝国主義戦争の爆發、資本主義の死滅の場として新たな意義をうけとるようになる、等々。

このように、『資本論』でもこれら三つの契機が「あつかわれている」とはいえ、そのあつかわれ方は、資本の一般的分析(換言すれば、産業資本主義段階の資本関係とその支配の一般的内容の分析)をおこなうのに必要な限りにおいて言及しておくということであつて、それ以上の究明なり言及は除外されている。だが、『帝国主義論』では、これらは帝国主義概念の基本的内容をなすものとして、いわば「真正面」から各諸章であつかわれている。このことは、二つの段階における資本関係の支配においてこれらの契機が占める先述のような相異つた意義を反映したものであつて、この点にも低い段階の資本主義の法則と高い段階のそれを究明する両者の「ちがひ」と関係がみられるのである。⁽⁴⁾

(4) それゆゑ、以上の見地からすれば、一部でみられるように、両著作のあいだには、右の三つの契機が「横たわつている」とか、前者から後者への「具体化」は、これら三つの契機のような「具体的概念および論理段階を媒介としてはじめて達成される」という見解(例えば、原田三郎氏の「帝国主義論コメンタール」——『経済セミナー』一九六二年四月号——を参照されたい)は、正しくないといわねばならない。こうした見解は、内容的にもさることながら、両著作が論理段階を異にした関係にあることを肯定したものであつて、論理段階の相違自体が一つの論理体系の内部でのみい

われうる事柄であることを看過している点でも、またさらに、両者があつかう資本主義の相異なる發展段階は、現実の資本家的生産様式の發展段階であつて、論理それ自身の段階とはならぬの關係もないことを看過している点でも、正しくないと考えられる。

なお、右では、当面の問題の理解を深める一つの例として、原田氏の見解のごく一部を引用したのであつて、氏の見解を全面的に否定しようとしたのではない。氏は、両著作の理論的發展關係を認められ、いわゆる三段階論がある程度批判しておられる。言葉の使い方や、その見解の種々の内容は別として、この点は一応氏の見解の積極的側面をなしていると考えられる。

つぎに、以前の資本主義と新しい帝国主義的資本主義との發展關係についてみれば、帝国主義Ⅱ金融資本は、資本關係のあらゆる部面への滲透(あらゆる部面や契機の支配)ということをおしてその基礎上に自己の支配を確立するのであつて、『帝国主義論』で示されている金融資本の發生と支配にかんする法則も、『資本論』で示されている資本の諸法則がゲルテンしているうえで生じたものである。換言すれば、金融資本が、資本の一般的支配ということをおして、そのうえに自己の支配をうちたてるようになると、すべての契機なり部面が、金融資本の網の目でおおわれ、いわばそのエーテルにひたされて着色されることになるからして、資本一般の支配は、金融資本の支配という形態をとつておこなわれ、資本一般の法則も金融資本の法則という形態をとつて貫徹するといふようになるのである。

(5) ある。そしてこの点に、新しい段階の資本主義（金融資本）が死滅しつつある資本主義であるという理由がある。なぜなら、金融資本は、一面では、生産の社会的性格を全面的に発展させるが、他面では、依然として、競争、市場の支配——資本家的私的所有の支配——のうえにある限りで、資本主義の基本的矛盾を飛躍的に激化させ、新社会のあらゆる諸条件を成熟化させるからである。

レーニンのつぎの三つの敘述は、以上の点をそれぞれ端的にのべたものである。「帝国主義と金融資本は、古い資本主義のうえにたつ上部構造である。その上層を破壊するならば、古い資本主義が現われるであろう。古い資本主義を伴わない純粹の帝国主義というようなものがあるという見地をとることは、希望と現実をとりちがえることを意味する」（第二九卷一四七頁、ゴチャック引用者）。

「社会経済体制としての資本主義の最も主要で本質的な特質……は、金融資本の時代になっても、基本的には変らないでいる。……帝国主義は、資本主義の諸矛盾を複雑化し、激化し、自由競争と独占とを『絡みあわせる』が、交換、市場、競争、恐慌等々を排除することはできない。帝国主義は、……死滅しつつあるがまだ死滅していない資本主義である。純粹の独占ではなくて、交換、市場、競争、恐慌と並んで存在する独占——これが帝国主義一般の最も本質的特質である。……このように、競争と独占という相互に矛盾する『原則』を結合してい

るということ、このことこそ、帝国主義の本質であり、このことこそ、崩壊すなわち社会主義革命を準備するものである」（第二四卷四二六—四二七頁、ゴチャック引用者）。

「独占は自由競争から発生しながらも自由競争を排除せず、自由競争のうえに、これと並んで存在し、そのことによつて幾多のとくに鋭くて激しい矛盾、あつれき、粉争をうみだす。独占は資本主義からより高度な制度への過渡である」（第二三卷二五三頁、ゴチャック引用者）。

ここで注意を要することは、帝国主義の本質が互に対立する競争と独占との統一として把握され、この点に崩壊の必然性が示されていることである。独占は、一方では、例えば生産の巨大な集積、「社会的規模における一般的簿記と生産手段の一般配分との形式」（マルクスの）発展等に見られるように、生産の社会化の全面的発達をもたらすが、他方では、それは競争と「ともにある」独占であり、資本主義の基本的矛盾を止揚しえず、かえつてその形態を複雑化し、激化させざるをえない。例えば独占相互間の競争も、植民地再分割のための斗争も、すべて独占が競争と「ともにある」（むしろ競争の形態である）からに外ならぬ。従つて独占を自由競争との矛盾においてとらえ、帝国主義の本質をこうした自由競争と「からみあつた」独占と規定することによつて、帝国主義の発生と死滅への必然性を端的に示しようといえよう。

なお、右の矛盾を階級的に表現すれば、それはなによりもま

ず、独占ブルジョアジーとプロレタリアートとの矛盾であるといえよう（この場合、変革の主要な担い手たるプロレタリアートに対して、ブルジョアジー一般に代り、独占ブルジョアジーがその最も主要な敵として現われていることに注目すべきである）。さらに、これにつけ加えて、独占資本家と中小資本家との矛盾、独占資本家相互の矛盾、あるいは、本国の独占資本家と植民地、従属諸国の諸階級との矛盾、列強の独占ブルジョアジー相互の、従って列強間の矛盾、——であるといえよう。そして、これらの諸矛盾の集中的爆発が帝国主義戦争にほかならない。資本主義の発展は、自己に内在して発展するその諸矛盾を止揚するのではなく、これらの矛盾がそれにおいて運動する形態を、今日ではまさにこのようなかたちで創造しているのである。

このように、右に引用した叙述では、帝国主義の本質的規定が、運動の観点——つまり、帝国主義を崩壊に向けてつねに進ませ、かりたてずにはやまぬ力Ⅱ矛盾をえぐりだすという観点からのべられていることは、とくに重視せねばならぬと考えられる。

以上要するに、産業資本主義段階の資本主義が、単純な商品生産者の競争、直接的生産者たちの「分解」をおして発生し、成長し、おくれた諸関係を破壊しながら、あらゆる分野で自由競争の全面的支配（従ってまた、資本関係一般の支配）と生産の社会化とをもたらすことによって、社会主義のための諸

条件を個々の国で作出したとすれば、帝国主義段階の資本主義は、自由競争と資本関係一般の支配をおして生まれ、その基礎上で、これらと矛盾しつつ全能の力をふるう独占（金融資本）を本質とし、資本主義の基本的矛盾を著しく発展させ、極度に激化させることにより、社会主義の諸条件を全世界的規模で成熟させ、社会主義の戸口へびったりと接近する「死滅しつつある資本主義」にほかならないのである。

『帝国主義論』は、このような帝国主義段階の資本関係の発展した内容——すなわち、新しい時代の資本主義的發展法則の具体的内容——を、産業資本主義段階の資本の一般的法則、従って資本主義の發展法則の理解に基づいて明らかにしている。言葉をかえていえば、『帝国主義論』における研究は、『資本論』において示されている資本主義の歴史的必然的傾向（とりわけ、「私的所有者のいっそうの収奪」の「新たな形態」の展開、あるいは資本主義の消滅の傾向）が、二〇世紀に入ってからどのような具体的内容をとっているか、あるいは、社会主義の諸条件一般がどのように具体的に成熟するにいたったかという観点からおこなわれているのである。

従って、『資本論』と『帝国主義論』とは、「原理規定」とその枠からはみだす「段階規定」という関連にあるのではない。両者は、同じ資本主義経済体制の歴史的運動過程に貫徹する客観的経済法則を総括的に追求し反映する同一の理論体系に属し、同時に、先にみたような、前者から後者へという理論的

発展関係にあるのである。(6)

(5) このようにいうことは、平均利潤の法則が独占利潤の法則と並んで貫徹するということを意味しない。先述したような資本関係の二つの内容が同時に存在することはありえない。そうではなく、資本一般の法則(剰余価値の法則というように限定して表現してもよい)が、産業資本主義段階では前者として、帝国主義段階では後者として発現するのである。『資本論』でこのような説明がされていないのは、当時、前者が唯一の形態だったからであって、これは認識上どんな人間もまぬがれえない制約として、まったく当然のところである。

(6) こうした把握は、この時代のプロレタリア革命の綱領を明らかにするうえで決定的意義をおびてくる。なぜなら、『帝国主義論』の以上の把握をみると、例えばつぎの諸点が引出されるからである。第一に、プロレタリア革命の前提諸条件の分析は、世界経済の状態の見地——帝国主義の世界体系において革命的條件の存在は如何、という見地——からおこなわねばならない。すなわち、①独占資本の支配は、生産の社会化を全面化させ、他方、その寄生的、腐朽的性格をあらわに露呈し、独占の横暴な圧迫をたえがたいものとして、自己に対する労働者階級と農民、中小資本家たちの斗争を強める。その結果、資本主義国内部でプロレタリア革命の爆発の諸要素を増大させる。②独占資本が植民地的抑圧と金融的絞殺の全世界の体系に転化し、地球人口を植民地従属国を搾取する少数の帝国主義国と、その抑圧からの解放を求めて闘わざるをえない大多数の植民地従属国とに分裂させた結果とし

一 国資本主義分析の基本的意味について

て、植民地諸国(「国外戦線」)でも革命の諸条件が増大する。③しかも、資本主義諸国の不均等な発展と矛盾の激化や列強における世界の再分割への強烈な志向の存在、また再分割の手段は戦争以外にはありえぬこと等々からして、一方では帝国主義の共同戦線の弱体化と、他方では、本国の反独占、植民地従属国の反帝国主義の斗争の結合が容易になる。第二にそれゆえ、④独占ブルジョアジーの世界の連合に對して、一国のプロレタリア革命運動を、全世界の反帝運動、世界プロレタリア革命の共同戦線の一翼として對置せねばならぬ。⑤プロレタリアートは、独占によるブルジョア民主主義さえも否定に對して闘い、この闘いと社会主義的変革の闘いを結合し、独占に抑圧されているすべての諸階級の反独占、反帝の統一戦線をつくりださねばならない。⑥帝国主義戦争に對しては、すべての国のプロレタリアートは、「この戦争を内乱に転化せよ!」というスローガンで闘うべきである。⑦同時に、帝国主義との斗争は、帝国主義によって必然的にうみだされる労働運動における日和見主義的潮流と不可分に結合されぬ限り、空文句にすぎなくなる。第三に、今日では、資本主義の不均等な発展の結果として、一国で社会主義革命が勝利する可能性がある。そしてこれまでは、一国内部の結果としてのみ、プロレタリア革命を考察したが、今日では、帝国主義の世界体系の矛盾の爆発の結果として、この体系の連鎖の最も弱い部分(「国」)における切断の結果として、これを考察せねばならぬ。

以上の考察からすれば、帝国主義段階における一國資本主義分析についてはなによりもまず、つぎの点が銘記される必要が

あると考えられる。

一九世紀の産業資本主義段階の一 国資本主義分析には、『資本論』における資本主義の発展法則の理論が適用されねばならなかったが、いまでは『資本論』にいわば「プラス」して『帝国主義論』が適用されねばならぬ。より正確にいえば、帝国主義段階における資本主義の独自の発展法則にかんする理論——『帝国主義論』（それは『資本論』を発展させたものであり、これをその基礎として「内包」している）——そのものが適用されねばならない。

とくに注意すべき点は、帝国主義段階における資本主義は、一握りの「先進」諸国による地球人口の圧倒的多数の植民地的抑圧と金融的絞殺の世界的体系に成長し、個々の国と国民経済は、この体系の一環に転化しているから、一 国の資本主義を一単位として孤立してとりあげて分析すべきでなく、右の体系の一構成要素としてのみ分析せねばならない、という点である。（この点では、すでに一 国資本主義分析ということ自体が、文字通りの意味ではあてはまらなくなるともいいうる。）

そして、『帝国主義論』を「一 国資本主義分析」に適用するということは、ある一 国資本主義の国民経済のあらゆる側面の中に、また、その国民経済を「とりまく」他の諸国との関連性の中に、この段階における資本主義の発展法則がどのように具体的に貫徹しているかを明らかにすることを意味している。このこととはまた、その国の社会主義革命への発展方向とそのため

の対内的、対外的諸条件、あるいは主体的客観的諸条件、従って、その国が世界の革命的潮流の中でおかれている位置、当面する世界戦争の階級的性格等々を具体的に明らかにすることと直結している。

む す び

これまでのすべての考察をとおして、とくに強調してきたことをごく一般化したのべれば、つぎのようにいいうるのである。すなわち、

第一に、一 国の資本主義、あるいは世界資本主義の「現状」を科学的にとらえるということは、対象を法則との関連で、法則によって説明することにほかならない。しかもこの法則とは、資本主義の発展の法則でなければならない。従って第二に、十五、六世紀から発生して今日にまで成長発展してきた資本主義の発展の法則のすべての内容を正確に把握し、それが資本主義の現実的過程の中に・世界経済と国民経済のあらゆる側面の現実的、具体的諸条件の中に・どのように貫徹しているかを具体的にとらえねばならない。このことが、資本主義の「現状」に理論を適用するということの意味である。従って第三に、いわゆる「現状分析」の問題はすぐれて理論的な問題にほかならない。だが、このようにいうことは、理論をとらえればあとはこれを機械的に「適用」すればよいことを勿論意味しない。一 国における法則の発現形態の特殊性を研究しないなら

ば、教条主義の誤謬を犯すことになる。ただ、資本主義の「現狀」を特徴づけているすべての特殊で具体的現象の認識を、資本主義の發展法則の認識と切離し、ある別箇の問題として提起するならば、その諸特殊性の必然的関連なりそれらの發生の必然性が見失われ、科学的取扱いが不可能になるのであって、両者は認識上の相互に依存しあう二つの過程だといふのである。いわゆる三段階論の誤りの根源も、事実上兩者の直接的関連を否定しているところにあると考えられる。第四に、前述の發展法則の全内容をとらえ、この理論の適用によって「現狀」を解明するのが科学的方法だとすれば、レーニンの著書『發達』と『帝國主義論』は、その模範を示すものである。前者は、一九世紀産業資本主義段階の資本主義の發展法則の理論¹⁾、『資本論』を適用し、一九世紀末葉のロシア資本主義の現实的發展とその機構を究明したものであるとすれば、後者は『資本論』に基づいて、二〇世紀初頭帝國主義段階にある世界資本主義の現实的發展をとりあげ、この時代の資本主義の發展法則を解明し、『資本論』を發展させたものである。これらの著作に貫徹している基本的観点は、運動²⁾發展の観点、すなわち資本主義の發展法則・資本主義に固有な諸矛盾の發展・をあますところなくとらえ、これを社会主義革命の諸条件の具体的把握に適用し、党綱領の理論的基礎をうるといふ観点であり、そのことによつて革命的实践に奉仕し、その中で適用した理論を検証し發展させていくといふ観点にほかならない。いわゆる構造改革論にみ

一 国資本主義分析の基本的意味について

られるように、科学的經濟理論を修正し否定せんとする潮流が強められ、これを打破ることが緊要事となっている今日、なによりもまず、以上の基本的見地を堅持することの重要性は何度強調されてもたりぬほどである。ただし、このことは現代修正主義の根本的特質の一つが、教条主義反対という美わしい言葉の葉陰で、資本主義の發展法則の發現形態の諸變化を法則そのものの、「根本的変容」ないし「止揚」と混同するところに存していることをみても、つとに明白なところだからである。

なお、本稿のこれまでの考察から明らかなように、一國資本主義分析の意味をより充分にとらえるためには、以上の考察に加えて、さらに國家独占資本主義にかんする考察——とりわけ第二次大戦後における資本主義の發展法則の内容の考察——をおこなうべきであらう。この考察は、またいずれかの機会におこないたいと考える。

(一九六四・九・一〇)